ガールズ ライフ ダイアリー

アボカドオイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガールズ　ライフ　ダイアリー

【Ｎコード】
Ｎ４６１３Ｓ

【作者名】
アボカドオイル

【あらすじ】
頑張っている女の子に送る、アメリカンライフなガールズストーリー。

目覚め（前書き）

少し長編ものが続いているので、ここらへんで一息入れて、アメリカンライフな青春ストーリーをちょっとずつ書いていきたいと思います。

これはディズニーチャンネルやゴシップガールなどのガールズコレクション系海外ドラマへ向けたオマージュです。

目覚め

アメリカ　カリフォルニア州の片田舎
６月、１６歳のトレイシーは、その時、深い眠りから目覚めたばかりだった。
ベッドの上で何日も洗っていないような茶色い髪がもつれている。
彼女はヘイゼルの瞳をしばたかせた。
いつも朝早い時間から起きていた彼女は、その日は少し遅くまで眠り過ぎたようだ。
なんだか体の節々が痛いのだ。
長い時間、同じ態勢で眠っていたかららしい。
でもなんだか違和感がある。
トレイシーが自分の腕を見ると、点滴の管が刺さっていた。
他にも管やら、何やらが刺さっている。
すっごく動きにくい。
病院の患者衣を着ている。
トレイシーは少し痛む頭を押さえながら、少しずつ思い出してきた。
彼女は今から２ヶ月程前、学校の登校中に、車に撥ね飛ばされたのだ。
そしてその後の彼女は、ずっと病院で意識不明の状態だった。
それと他にも思い出した。
彼女は眠ってる間、体から抜け出て、自分を心配しつくれている人々や、学校の級友達を見ていたのだ。
そう、彼女は臨死体験をしたのだった。
それまでのことを思い出している最中だが、病院のこのフロアにあるナースステーションから、ドアが少し開いていたのか、ビニールのカーテン越しに音楽が聞こえてきた。
すっごくご機嫌な曲で、明るい女の子の声で歌っているポップスだ。
それまで真面目一辺倒だったトレイシーは、テレビ番組はおろかＭ

ＴＶなんて見たこともなかった。
だからそれが誰の曲かわからないのだが、トレイシーは初めてこの曲を聞いたことで、アーティストというものに興味を持った。
この曲が何か、ナースステーションにいる看護師に聞きに行きたいが、管が邪魔して身動きができない。
彼女は傍にあるナースコールを鳴らした。
看護婦が意識不明の患者の部屋からナースコールが鳴ったことに、慌てて、すぐにトレイシーのいる部屋に駆けつけた。
すると沢山の管が刺さった目覚めたばかりの患者は、爽快な顔つきでこう言ったのだ。
「ねえ、この曲、歌ってるの誰？」
今まで、目覚めなかったはずの患者の第一声はそれだった。
またその顔は意外にも明るかった。
看護婦は彼女が覚醒したことに驚きながらも、この曲を歌うアーティストが誰か教えてくれた。
この曲はＰｅｒｍａｎｅｎｔ　Ｄｅｃｅｍｅｒという曲で、歌っているのは、もとディズニーチャンネルのアイドル、シークレットアイドル　ハンナモンタナ役のマイリー・サイラスだと教えてくれた。
それを教えると看護婦はすぐに医者を呼びにいった。
どうやらトレイシーはずっと意識不明のままだったらしい。
目覚めた彼女のもとに両親が駆けつけ、娘が目覚めたことに喜んで泣いていた。
「ねえ、泣かないでよ。
恥ずかしい。それよりさあ、ゴシップス買ってきてくれない」
感動で泣いていた両親はそれを聞いて、はあ？という感じでトレイシーに聞き返した。
するとトレイシーは、暇なのよ。悪いけど、ゴシップ誌を数冊買ってきて欲しいの、娘はやっと目覚めたと思ったら、両親にゴシップ雑誌を買ってきて欲しいと言ったのだった。
トレイシーは私立の高校に奨学金で通う、優等生だ。

彼女は、それまでおしゃれや、芸能人のゴシップネタにはまったく縁のない生活を送っていた。
しかし、事故の後、目覚めた彼女は何かが変わったようだ。
まだ療養のため病院に入院しているうちから、両親にゴシップ誌や、ファッション雑誌を買ってきてもらい読みあさっていた。
彼女はそれらの雑誌を読みながら、両親や、見舞に訪れた友人達に、やれ今年の流行はどうだの、今年のネイルの流行についてなどと言って聞かせては、真面目な彼女を知る者達を驚かせてといた。トレイシーがこんな風に、おしゃれや芸能人のゴシップに興味を持つくらい変わってしまったのはやはりあの事故が原因だった。

stuck up bitch（すかした、やな女）

もとい事故での臨死体験が、・・である。
トレイシーはおしゃれに興味がないといっても、いつも化粧品販売員の母から口すっぱく、女性は綺麗でいなければならないと聞かされていたので、若い女の子の弾けたファッションはしなくても、いつも清楚で小綺麗な服装を心がけていた。
アメリカは西海岸の高校生というより、一昔前のイギリスのプレッピースクールやアイビールックを連想させるような格好が殆どだった。
今時の高校生にしては地味な格好だったが、彼女はクリスティン・ベル似の可愛娘だったのだ。
その為、地味な格好でも良く見えたのだった。
だがそんな彼女はアメリカ人にしては授業中以外は口数が少なかった。
あまり自己主張しないタイプなのだ。
側から見てると、彼女は大人しくて優しい女の子に映ったことだろう。
だからなのか清楚な優等生の彼女は、何故か一部の男子には人気があった。
まあ、アメリカの気が強い女に嫌気がさしたような男の子が大半だが。
その為、同じ優等生の友人達以外の女子は、彼女がすかしていると言って、少し嫌厭していた。
だけどあの臨死体験で彼女は周りの自分に対する評価を知ってしまったのだ。
事故で病院に運ばれた彼女は、すぐに救急救命室に連れていかれた。
医者が処置を施しているとき、彼女は自分の体から浮き上がり、天

井を見つめていた。
すると誰かが自分の名前を呼んでいる声がした。
誘われるように、その声のする場所に、体が勝手に移動したのだ。
まあ体といっても幽体なのだが。
すると彼女はまるで天国のような、雲の立ち籠める風景の中にいた。
「やあ、トレイシー」
彼女に声をかけたのは、見たことのない黒人の男性だった。
男はまるでクレイグ・ディビットのような端整な顔立ちの良い男である。
「あなた、誰？」
トレイシーがその黒人の男に尋ねた。
「僕かい。まあ一般的に言ってみれば、よく皆は、天使というね」
男は邪気のない笑顔でそう言った。
「天使？天使ってことはあたし、やっぱり死んだの？」
トレイシーは男にまた尋ねた。
「ふふふ、・・・いやそうじゃないよ。
君にはまだ、やらなければならないことが沢山あるからね」
男は少し笑ってそう言った。
「じゃあ、何で私はこんな所にいるの？」
そう尋ねたトレイシーに対して、男は冷静な口調で答えた。
「君は事故に遭って体から魂が離れたんだ。
でもまたすぐに元に戻る。
だから心配しなくて大丈夫だよ」
それを聞いてトレイシーは安心したが、やはり何故ここに来たのかについては解らないのだった。
「実は君が体に戻る前に、見て貰いたいものがあるんだ」
男がそう言うと、またトレイシーの体が浮き上がり、別の場所に移動したのだった。
すると男が連れて行った場所は、病院の待合室で自分のことを心配している両親や、私立学校の友人達の姿を見せてくれたのだった。

両親は二人共、彼女が事故に遭ったことに悲しんでいるようだった。
また、優等生仲間の友達は本当に心配してくれているらしい。
しかし、彼女を嫌っているその中の女子3人は、彼女の不幸を喜んでいるようだった。
彼女達は休み時間のトイレで話をしていた。
「ねえ、トレイシー事故っちゃったんだって」
「ざまみろって感じよね。
ちょっと可愛いからって、いい気になっていたじゃない」
優等生仲間の中で、男子にちょっと人気のあるトレイシーを嫌うのはこの3人だけだった。
だが、トレイシーはその時初めて、自分が彼女達に良く思われていなかったことを知ったのだ。
「ショックかい？」
「いいえ、しょうがないわよ。
人には好き嫌いがあるんだもの」
そう答える彼女に、天使という男は次に行こうとまた別の場所に移動した。
すると今度は、別の級友達の会話風景である。
実はアメリカの学校の生徒達とは、フランクそうに見えて、意外に仲間意識が強く、自分と合うグループを作って群れているものなのだ。
その子達は、その学校に通う金持ちのお嬢様連中のなかでも、日本でもお馴染み、ドラマ　９０２１０（ビバリーヒルズ高校生白書）やゴシップガールを地でいく、意地悪でお洒落なグループである。
皆そんな彼女達に憧れる反面、やはり怖いので、関わらないよう嫌厭していた。
「ねえ、ねえ、トレイシー事故っちゃったんですって」
「ボーッとしてるからじゃないの。
本当に、彼女いつも似たような代わり映えしない服着て、鏡見てんのって感じだったわよね」

「でも、あれで男には結構人気があったのよね。
あんまり私達が相手したくないタイプの腰抜け男とか。
大体、男は馬鹿だからコントロールしやすい地味な女が好きなのよ」
そこにいた金持ちお嬢様意地悪グループは全員一致で、本当そうよねーと言った。
そして更に、あんな地味な人生、私なら冗談じゃないわ。
あの子は、親のお気に入りの優等生のまま年とったんじゃないの。
服も地味なら、生き方も地味。
などと彼女が傷つくことを言ったのだった。
しかしトレイシーはそれを聞いても、意外に平気だった。
実は、前々から自分自身も彼女達のいうとおり、両親の言い付け通りに生きている自分に、少し不満だったからだ。
本当にそうだよな。
大体、皆みたいに少しくらい派手目のシャツやタイツを身に付けることも、親の目が怖くてできなかったのだから。
彼女はいつも両親のお気に入りであるように振る舞ってきたのだ。
優等生としていつかはアメリカの名門大学に入学し、エリートとして生きる。
彼女はその為に、必死で勉強に励んでいた。
でもその傍らでいつも、自分と同じくらいの女の子達が、ファッションや、恋の話に興じているのを羨ましく思っていたのだ。
本当はトレイシーだってお洒落や男の子の話題をあんな風にしてみたかった。
しかし、彼女の属する真面目グループにはトレイシー同様、そんな話題に興じる人間はいなかった。
トレイシーは勉強を頑張る傍ら、時々そんな日常がつまらないと思っていたのだ。
などと考えごとをしていると、するとまた別の場所に移動した。
今度は、その学校の、おしゃれだけれど普通の女の子達のグループ。

その普通グループの会話風景を見せられた。
「トレイシー可哀想ね。
事故に遭うなんてさ」
その中の黒人の女の子が言った。
「でもあの子、少しすかしていなかったっけ。
なんか自分は他とは違うんだって雰囲気全開だったじゃん」
するとそれを聞いて、その中のブルネットの髪の女の子が言った。
「本当にそうよね。
ていうより、なんか話がついていけなさそう。
何にも話さないから何考えてるか解んないし。
宇宙人って感じじゃなかった？」
「がり勉でさ、真面目に授業とか受けてんの。
なのにあれで男どもには結構人気があるのよ」
今度は赤毛の女の子がそう言うと、そこにいた普通グループの女の子達は、お互いに顔を見合せて、そうだよね～。さむ～い、と言ったのだった。

ｓｔｕｃｋ　ｕｐ　ｂｉｔｃｈ（すかした、やな女）（後書き）

まだ続きますが、次の投稿は２日後になるでしょう。

決意

他の女の子達も同じようなものだった。
ただし、彼女を慕う男子生徒達は違っていたが、「トレイシープー（トレイシーちゃん）可哀想」
「本当だよな。
あの他の女にはない競争心なしの雰囲気が良いんだ。
それにあの笑顔が見られないかと思うと寂しいよな。
またあまり露出のないあの服装が、かえって良かったんだよなあ」
「ほんと、脱いだらきっと凄いんだって想像が働くよなぁ」
トレイシーを好きな男は外人の癖にむっつりスケベが多い。
そのむっつりスケベの大体の男の子達は、トレイシーのどこが好きかと言えば、優しそう、おとなしそう、自分の言うこと聞いてくれそう、だった。
つまり、あくの強いアメリカ人女性のなかで、真面目、純粋、おとなしい、優しい、自己主張しない彼女は男の子達にとって自分の思い通りにできそうな女だった。
それを聞いていたトレイシーは気持ちが悪くなり、おまけに何故か知らないが怒りが込み上げてきた。
結局、自分は周りの人間達から、おとなしそうな地味な子で、真面目でがり勉で、話しの合わない宇宙人で、つまんなくって、おまけにコントロールしやすそうな女、と思われていたのだ。
その彼女に対する評価は全て、自己主張をしない彼女への誤解なのだが、アメリカ人にとって、個性をあまり出さない地味な人間はあまり良い評価を受けないものなのだ。
これを聞いて、結構自尊心の強い彼女は思わずこう決意したのだった。
もし元通り体に戻ることができたら、今度は自分の思い通りの人生を送ろう。

・・・・・・・天使はそれらを見せた後に、彼女にこう言った。
今まで見てきたことは全て、これから先、君の役に立つことだ。
だから心配する必要はないよ。
そう言うと彼女を病院の彼女が眠る部屋へ連れてきてくれたのだった。
そのまま彼女は自分の体に吸い込まれるように入っていった。
そして目が覚めたら、あの通りというわけだ。
彼女は意識が戻ってからは、入院中におしゃれ磨きに専念した。
まずゴシップ誌やファッション雑誌から、今年のトレンドを勉強し、
また携帯のネットでトレンド情報や、今のティーンに人気のあるアーティストについて調べた。
母に頼んで買ってきてもらったネイルケアセットで爪を磨き、またスキンケアを徹底した。
「やっぱり美肌は食事療法が一番よね」
彼女は病院の食事で肌が綺麗になったことから、食事の大切さを学んだのだった。
そしていよいよ学校への復帰の日。
その日の朝トレイシーの部屋からは脱アイドルを計ったマイリーサイラスの曲がかかっていた。
彼女はマイリーの歌を一緒に口ずさみながら学校に行く支度をした。
彼女はいつも通りの時間に起きていたが、朝食の席で家族皆を驚かせた。そこにいるのはテイラー・モムセンかと思われるような、アイラインを強調した派手なメイクに、また長い髪はローレン・コンラッドのように、おしゃれに緩く巻いてある。
ブラックデニムのハードなスタッズ入りサマージャケットはお洒落に袖が七分までで丈は長くなく決して暑苦しく見えない。
インにしているのは今流行の緩い白Tシャツに、ボトムは濃いネイビーブルーのショートパンツと素足を出した格好をしたトレイシーだった。
おまけにどこから見つけてきたのか、ゴシップガールのブレアが身

に付けそうなシルバーのチョーカーネックレス、少し控えめなビジューヘアアクセをつけている。
どこから見てもおしゃれな今風の女の子である。
だが西海岸というより東海岸ファッションに見える。
肌は服が生えるように小麦色に日焼けしている。
トレイシーは病院から戻って来てから、家の庭で肌を焼いたのだった。
また入院中に腕立て伏せやスクワットなどで鍛えたらしく身体は引き締まっていた。
そんなトレイシーに両親も弟も家族は皆、絶句していたが、彼女が病み上がりということもあり、お小言を言うのは控えたのだった。
今日の彼女の靴は甲まで覆うブーツタイプのサンダルだった。
病院から戻った彼女は貯金をはたいて、安い服や、可愛い古着を探しまくり、また少し改造して可愛く変えたのだ。
そして今日の装いが完成したのだった。
また化粧品は母の化粧品棚から拝借したものだった。
アメリカの女性達にとって化粧というものは、学生の時に楽しむもので、大人になれば忙しくなり化粧に構わなくなるものらしい。
その代わりエステに通って素っぴんでも見られるようにピーリング等をしてもらうそうだ。
化粧が学生の時に楽しむもので、大人になったらしなくなるという点では日本とは逆なのだ。
だからアメリカの高校生がケバイのは皆、精一杯、今のうちにと思って化粧を楽しんでいるからなのだ。
トレイシーは今のうちに化粧を楽しんで良かった。
どうせ大人になったら化粧にかまける時間も無いかもしれないし、とそう思ったのだった。
母から拝借したマニュキアでフレンチネイルをしてみた。
なかなかの良い出来だ。
彼女は学校に行く迄の間、車の中でそんなことばかり考えていた。

母は気を使ってくれて、学校の校門とは反対側の道路には車を止めず、校内の中まで送ってくれた。
トレイシーは今までと違い、自信に満ち溢れ、校舎の中へと威風堂々と歩いていった。

決意（後書き）

あと1話で終ります。

ｃｈａｎｇｅ（前書き）

久々の登校のトレイシーは何が変わった？

change

その日、学校中がトレイシーの変わりようについて噂をしていた。
彼女がいきなりあんな風に変わったのは、事故で頭を強く打ったからじゃないか？
いいや、きっと記憶喪失になったんだよ。
等と勝手な噂が飛び交っていた。
しかしそんな周りの反応を他所に、トレイシーはお洒落な格好ができて嬉しかった。
なんだか新しく生まれ変わった、そんな気分だった。
周りの反応は、変わってしまったトレイシーを不思議がるばかりだったがトレイシーはそんな他人の目等、気にしていなかった。
いつものランチの時間だったが、派手な格好のトレイシーには当然、今までの真面目グループは近づこうとしなかった。
でも彼女は、こうなることを予想していたので、あまり気にすることも無くランチを食べていた。
「ねぇ、ここ座っていい？」
そこに、前に天使が見せてくれた普通グループの黒人の女の子が声をかけてきた。
アメリカ人というのははっきりしていて、自分の気に食わない奴の側には絶対に座らない人種である。
真面目グループは嫌厭しているようだが、普通グループの女の子達は自分の席に座ってきたのだ。
「どうぞ」
確かに天使に彼女達の会話を見せてもらい傷ついたが、それまで一人寂しく食事をしていたトレイシーは嬉しくて、満面の笑みで彼女達を席に招いた。
するとその中の黒人の女の子が改めて自己紹介した。
お互い面識がないわけではないが、多分あまり話したこともないか

らだろう。
「私はアマンダ！
スペイン語の授業で一緒よ。」
「知ってる！」トレイシーはそう言って答えた。
あとは普通グループの女の子達が順に改めて自己紹介していったのだった。
「すっごい可愛い。ねえ、そのペンダントどこで買ったの？」
「ああこれ、街の外れにある古着屋で買ったの。
この靴もそうよ」
「本当、どこか教えて？」

彼女達は今日のトレイシーの装いを気に入り、身につけている服を買った店はどこか知りたがった。
トレイシーと普通グループの女の子達はそこで、ファッションの話題や気になる男の子の話題、芸能人のゴシップ等に興じていた。
たいていの賢い人間ならバカにしそうな会話であるが、それまで真面目に生きてきたトレイシーにしたら普通の女の子同士の会話が、とても嬉しく感じられたのだった。
こうして彼女の学園生活は少しずつ変わっていくのだが、それはまた別の機会にお話しましょう。・・・・　・・・・・・・・

ｃｈａｎｇｅ（後書き）

ガールズ　ライフはここ迄で、また来月にガールズ　ライフを一昨書こうと思います。
これから少しずつ書いていくつもりです。
ところで説明し忘れてましたが、彼女の通っている学校はプレッピースクールが舞台です。
ちなみに彼女が住んでいるのはカルフォルニアの片田舎ですが、学校は郊外にあります。
最初で説明文入れるのを忘れてました。
すいません。
ではまた、お会いしましょう。

ブラインド　デート（前書き）

普通グループと仲良しになったトレイシー。
今回はブラインドデートをすることになったが・・・

ブラインド　デート

では、物語のはじめにトレイシーと新たに友達になった仲間を紹介しようかな。
まずは、アマンダ・ルイス。黒人の美人。
父親が大手カフェチェーンとＩＴ会社を経営。
祖父の小さなカフェから始まり、一大チェーンに上り詰めたこともあり、父の経営哲学は地道さと経営努力（ほぼ祖父の教えらしいが）。
そのためお嬢様にしてはあまり羽振り良い暮らしをさせてもらってないとは本人の談。しかし身に着けている服もどれも、やっぱりブランド物等、高級品ばかり。
ブルネットにグリーンの瞳のセクシーな彼女は、アレクサンドラ・バルディ　イタリア系アメリカ人の家系だが父は著名な経済学の大学教授であり、本を何冊も出版している。
曽祖父の代から学者やアメリカの名門大学で教鞭をとる者や、また有名な文学者を輩出している。そのため彼女の家の家訓は努力と知恵らしいが、本人はそんなことよりティーンらしく男の子とおしゃれに夢中。
エレノア・キャンベル　金髪碧眼のかわいらしいタイプの女の子。ファッション編集者の編集長を務める母との母子家庭で育つ。父は有名なフォトグラファー。両親は別居中。奔放でおしゃれな母親の元で育ったが、忙しい母に代わり、祖母に育てられた為か根は純粋な優しい娘である。だがおしゃべりなのが難点。
赤い髪に濃いブラウンの瞳の個性派美人の女の子はニコール・エヴァンズ
弁護士の母と有名俳優の父を持つが、両親が離婚してからは母に育てられた。
もともとは国選弁護士だった正義感の強い母は、彼女を育てる為に

国選弁護士からインハウスローヤー（企業・組織に所属する弁護士）に転向した。
母の教えどおり正義感の強い勝気な娘に育つが金持ちの娘の例に漏れずおしゃれにばかり夢中の彼女を心配しており、毎回父親から彼女宛の破格の養育費が支払われているようだが、娘に贅沢をさせようとする父親に苦い思いでいるらしい。
トレイシーの通う高校はプライベートスクール、いわゆるプレッピースクールである。
つまりお嬢様やお坊ちゃまが通う私立の大学進学を準備する為の中等教育学校のことだ。
しかし大学進学準備を目指すというが、実情は金持ちの子弟が羽振りを利かせて見栄の張り合いをしているような学校にも見える。
だが、トレイシーのように真面目に勉学に励むものもちゃんと存在する。
ちなみにこのプレッピースクールにはちゃんと制服というものが存在するが、旧９０２１０（ビバリーヒルズ高校生白書）が流行った時に、トレイシーたちのＯＢ達によって制服自体を無くそうという運動が起こり、場所がカルフォルニアということもあってか冬場は制服のジャケットのみを必ず着用し、それ以外は服装は自由ということになったらしい（設定では一応制服は存在してます。着る人はあまりいないけど）。
だもので皆ここには各自、自由な服装で登校してくる。やはり西海岸の若者らしい服装が多いが、身に着けているものはほとんどが高級品ばかりだろう。
トレイシーは一般庶民の娘である為、高級ブランドなんてもちろん手が出せない。
しかしそんなブランドやなんやに目もくれず普通のティーンらしくお金をかけることなく賢くおしゃれを楽しんでいた。
お金持ちの意地悪グループの女の子たちの中でそんな彼女のノーブランドの服をからかう者もいたが、彼女は自分が贅沢できない庶民

であると開き直っているし、またお金をかけないでおしゃれをすることが賢い消費者として誇りを感じているので、そんな彼女たちのことは何も気にしていなかった。
普通グループのお嬢様連中はそんなことで卑屈にならず賢くおしゃれをする、また話してみると意外に明るいトレイシーに好感を持ってくれたらしい。
でもやっぱりその普通グループの中でも真面目気質のトレイシーはどこか浮いた存在だった。
「ねえ、今度皆で、新しくできたクラブに行かない？」
という話題が出た時だった。
「クラブ？何、運動部？それとも生物部とか？もしかして美術部とか？」
トレイシーはてっきりクラブとは、学校の部活動だと思ってしまった。
「何言ってんのよ。親父みたいなギャグ飛ばさないでよ。クラブったらダンスに、ボーイハントにアルコールを飲むとこでしょう」と笑われてしまった。
それまで真面目に生きてたトレイシーには存在しないキーワードだった。だいたいなぜ高校生がそんな場所に入れるのかも不思議なら、酒を飲みボーイハントする高校生の女の子という構図さえ浮かびにくかった（アメリカの高校生は普通にやってそうだよね。知らんけど）。
「ねえ、ねえ、トレイシーって彼氏とかいるの？」アマンダが突然そう聞いてきた。
「いいえ、いないわよ」
「じゃあ気にになる男の子とかいるの？」
そういえばこれまで勉強ばかりで周りの男の子たちを誰がいいとか考えたことも無かった。ただ周りの女の子たちがそんな話題で盛り上がるのを羨ましそうに見ていただけだった。
トレイシーはその問いに首を振って答えたのだった。

「そうなんだ。じゃあさ、今度あたしと2人でブラインドデートしない？」
ブラインドデートとは友達の紹介などで異性を紹介してもらい、2対2でデートをするいってみれば少人数の合コンとか、またはお互いに責任の伴わないかるいお見合いのような感じかな（たぶん）。
というわけでトレイシーはアマンダと共にブラインドデートをすることになったのだ。
トレイシーはティーンの女の子らしく、初めてのブラインドデートということで気分はすごくノリノリだった。
郊外のカフェでアマンダと待ち合わせた。今日のトレイシーの装いは、ブルーのルーズTシャツにカーキのミリタリーパンツ。
シルバーのインディアンジュエリーやターコイズのアクセサリーを重ね付けし、髪は無造作に今風に下ろしていた。
バックはレオパード柄の大き目のやつで、足元は茶色のグラディエーターサンダルだ。
一応トレイシーなりに考えて、相手に警戒心を持たせず親しみやすいおしゃれなファッションできたつもりだった。
だがそんなトレイシーとはアマンダは対照的な格好をしていた。
素肌を見せた今年流行のロマンチィックな小花柄ワンピースはブルーで、それをかっこよく着こなしている。
長い髪は編みこみにして一方にたらし、足元は黒のグッチのストリングサンダル、白のＭＹＵＭＹＵＵの大きめバック。彼女が着ると甘くなりがちなワンピースがセクシーにかっこよく見える。
トレイシーはもしかして今日の格好ははずれだったろうか？とアマンダの格好を見て思いはしたが、いまさら着替えに戻るわけにもいかないし、開き直って気にしないことにした。
暫くするとカフェにトレイシーたちくらいの男の子が2人中に入ってきた。
彼らの中の黒人の男の子がきょろきょろと店の中を見回していた。
「あっ、マーク。こっちよ」

アマンダがその子に手を振ると、彼等は彼女たちの席にやってきた。
どうやら彼等がトレイシーたちのブラインドデートの相手らしい。
「ごめん、待った？」
「いいえ、今来たばかりよ」
アマンダがそういうとその黒人のマークという男の子は、カフェの丸テーブルのアマンダの横に座った。
「ところで例の友達は彼女、トレイシーよ」
「ハイ、トレイシー」
マークがトレイシーに挨拶した。
彼はアマンダのＢＦでマーク。どうやら彼女たちと同じ学校の１年上の１１年生らしい。
マークはとても礼儀正しくて人の良さそうな人だった。
「彼が君のブラインドデートの相手だよ。僕の友達ブライアン」
ブライアンというトレイシーのデートの相手は、彼女を一瞥すると若者特有のシニカルな笑いを浮かべて挨拶した。
「ああ、君がトレイシーか。よろしく」ブライアンはみたところお調子モノタイプに見えた。
短いブラウンの髪はワックスで固め、今風の男の子らしくルーズなヴィンテージのジーンズに上はカーキ色のチェックのシャツ。
靴はナイキの高そうな最新のスニーカーを履いていた。
そのブライアンはトレイシーを見るといきなりため息をついた。
「君はどこの学校に通ってるの？」
いきなりそうブライアンに質問された。
「えっ、私？私も貴方と同じ高校に通ってるのよ。
アマンダと同じ１０年生よ」
「へぇ～。あまり見ない顔だから、別の学校の生徒かと思った」
そういえば今までは特に目立たないように振舞っていたからそう思われるのもしょうがないとトレイシーは思った。それにトレイシーも彼らが同じ学校の生徒であることすら知らないかったのだからお愛顧である。

「僕はてっきり中学生くらいかと思ったよ」
ブライアンはトレイシーに対してそういった。
それを聞いてトレイシーは思わずストローで飲んでいたコーヒーを噴いてしまった。
「ホントは中学生だったりして。僕適にはもっと大人っぽい娘がいいんだけど。ねえ君、お姉さんいない？」
ブライアンのその失礼な問いに対して、トレイシーは思わず固まってしまった。
「失礼だろ、何でおまえそんなこと言うんだよ」
マークがブライアンにそういうと、ブライアンは続けてこういった。
「ごめん、ごめん。悪気は無いんだ。
ところで君どっかで見たことあると思ったら、あれに似てるんだ」
あれって、あれってなんだろうか？何か失礼な言葉が飛び出しそうだが、前回も書いた通りトレイシーはクリスティン・ベルに似ている。彼女はよく人からクリスティンとそっくりといわれていたので今回もきっとそのことだろうかと思っていた。
「ああ、あれだ。そうだよ。君、ビーバーに似てんだ。ほら、よく野生の王国とかに出てる」
彼がそう言ったので、トレイシーは再び口に含んでいたアイスコーヒーを噴出した。今度は隣に座っていたアマンダにそれがかかった。
「ごめん」アマンダはきったないと言いながら、ハンカチで顔を拭き大丈夫という素振りで彼女に首を振って見せた。
ビーバー、ビーバーとは哺乳類のことでビーバー属に属する（ＢＹウィキペディア）、ってあのビーバーかい？
「ああ、今日はセクシーな美女に会えるって期待してたんだけど、キャンディス・スワンボワール（ウ〝ィクトリアシークレットエンジェル）みたいな。でもまさか相手が君なんてさ。しかし胸がちっちゃいよね」
ブライアンは悪びれもせずに再びそう失礼なことを言って周りを凍りつかせた。

トレイシーもアマンダもその失礼な言葉に驚いて固まっていた。
トレイシーは思わずこう思った。小さくない、小さくない、私の胸は小さいほうではない。
絶対に同じくらいの高校生の女子の中では標準サイズだ。ただキャンディス・スワンボワールと比べると小さいだけだ。
「おい、おまえちょっと来い」
たまりかねてマークが話があるとトイレにブライアンを連れて行った。
高校生のブラインドデートでキャンディス・スワンボワール並の美人を紹介してもらえると思い込むなんて奴は馬鹿なんだろうか？
それともマークがそんな感じの女の子を紹介すると嘘をついて連れてきたのだろうか？いずれにしてもトレイシーには面白くない状況である。
「ねえ、私彼とは初対面のはずなんだけど。とっても失礼な奴じゃない？」
「ええ、・・・・」
アマンダはばつが悪そうにそう答えた。
「ていうか、あいつ殺していい？」
トレイシーは怒りの形相でフォークをグーに持ち替えてそう言った。
「ほんっとにごめんね」
アマンダが手を前に合わせながらごめんねのポーズでトレイシーに謝った。
彼女はマークとブライアンがトイレから戻るまでの間、そうやってトレイシーに平謝りに謝っていた。
そのあとは皆でボーリングに行ったり、おしゃれなレストランで食事をしたりしたが、トレイシーは当然楽しめず、空気の読めない男ブライアンはなにやら一人ではしゃいでいた。
「おお、あそこにグラマーな女発見」
「行ってこれば？」
トレイシーはそっけなくそう言って、行って来い、そしてここには

二度と戻ってくるな、そう心の中で呟いていた。
「本当に？君って話のわかる人だなあ。なんだか仲良くなれるかも」
ブライアンはそう言ってますますＫＹにトレイシーをげんなりさせたが、誰がお前と仲良くなんかなるか、トレイシーはさらにそう呟いた。
結局、トレイシーの最初のブラインドデートは最悪なものとなったが、アマンダが必死で謝ってくれて、次はもっといい人を紹介すると約束してくれたので良しとした。
それに確かにデートの相手は最悪だったかもしれないが、トレイシーは初めてのブラインドデートを経験し、おしゃれなカフェやレストランにも行けたのだから、それはそれで楽しかったかもと思ったのだった。
今度ブラインドデートに誘われたら、その時はもっとおしゃれでセクシーな格好にしよう（つーかもうブライアンはありえないからＢＹトレイシー）、トレイシーはそう反省して眠りについたのだった。

ーつづくー

ブラインド　デート（後書き）

遅い投稿でゴメンねー。
どうぞこれからもトレイシーのアメリカンスクールライフをお楽しみください。

苦手なホームワーク（前書き）

お待たせしました、かなりお久しぶりです。
やっとこさ描く時間が持てまして、かなり長い間ご無沙汰でしたが、
またよろしくお願いします。

苦手なホームワーク

セレブ高校生の通うプレッピースクールは、一応大学進学を目指す進学校である。
断っておくが、この物語の中では、ドラマ　ゴシップガールやパリス・ヒルトンのように、遊んで暮らす学生ばかり出てくるわけではない。
やはり、大学進学を目指す学生らしく、トレイシー達も勉学に勤しんではいるのだ。
因みに彼女達は、それぞれクラブに所属し部活動に精を出してるし、ボランティア活動を行ってたりもする。
これらは皆大学進学の為に必要な評価となるもので、それなしで大学へ入学することが難しいのがアメリカである。
今日もトレイシーと、普通グループの仲間達は友人の家に集い、勉強に励んでいた。
今日はエレノアの住む郊外の高級アパートメントの部屋で、解らない所を互いに教えあう等しながら勉強を続けていた。　といっても、やはり秀才のトレイシーが、殆ど彼女達に家庭教師よろしく教えていたといった方がいいだろう。ところで一般のこのくらいの女子高生は、苦手とする科目が物理、数字や歴史である。
特に歴史は女性で苦手な人が多いらしく、その理由を挙げれば、彼女達にとって過去に起こった自分が生まれてくる以前の出来事に興味が湧かなければ、そこに年号を覚えるということも加わって、つまらなさは二倍になるのだそうだ。
なのに彼女達が今回授業で出されたホームワーク（宿題）は、個々に興味のある歴史について調べてレポートを提出しろというもの。
アメリカの授業カリキュラムには、アメリカ史はあっても、何故か世界史の授業は無かったりする。
だから今回出された課題は彼女達にとって非常にめんどくさい作業

だった。
そういえば、アメリカの学生に出されるホームワークは変なものが多かったと、アメリカに留学したことのある知人から聞いたことがある。
何でも、その人が一番驚いた宿題が、日本の竹取物語の翁と、その婆様の名前をフルネームで調べてこいというものがあったらしい。
勿論、アメリカの教科書にそんなものが載ってる筈もなく、本屋で苦心して探そうにも見つからず、当時はそんなにインターネットの普及している時代でもなかったので、生徒達は苦労したそうだ。
その変なホームワークの殆どは、アメリカ人の独創性や自立心を育てる為にさせていたらしいのだが、変な課題を与えられた生徒達にはいい迷惑である。
当然、歴史はおろか、勉強嫌いの彼女達は、外国の歴史よりも、自国アメリカの植民地時代から建国までの歴史や西部開拓時代について調べると人気が集中していた。
「ねえ、なんか一々、大昔の話について調べるなんてバカバカしいよね。
眠くなっちゃいそうだけど」
と金髪娘エレノアが言った。
「そお？
私は楽しいけど」
とトレイシー。
優等生のトレイシーは、そんなアメリカの女子高生にしては珍しく、歴史が好きなタイプだった。
「えっ？
何で、こんな今更どうでもいいことを学ぶのが楽しい訳？」
そこにいたアマンダやニコール、アレクサンドラことアレックスが聞いた。
「だってさ、こういった過去の事柄を調べていくと、今現在、私達が生きているこの社会の社会情勢にしろ、人の生き方にしろ、今は

亡き故人に習う点が多いと思うからよ」
「そお？
でも私、顔も知らない人達のことを、逐一知ってもつまらないけど」
意外にも、そう言ったのは超知的階級の家柄のアレックスだった。
「そうよ。
何が楽しいのよ？
昔の有名人の話なんて、ハリウッドセレブじゃあるまいし、冗談じゃないわよ」
とアマンダ。
「大体、歴史に対する感想なんて、昔の人は苦労してたんだなと、調べるごとに鬱になりそうだわ」
それを聞いてトレイシーも納得した。
確かにニコールの言う通り。
世界の歴史を紐解いていくと、残酷極まりない話や、疫病や飢餓にみまわれたり、宗教間の対立や土地を巡る争いや迫害など、当時の人々を取り巻く環境は、現代のネット社会を生きる彼女達にとっては、信じられないお話で、書籍やネットに書かれた文字を読むごとにうんざりしてくるのだろう。
そうして段々歴史への興味を失っていくのだ。
「ねえねえ、歴史の話を頭の中で、映画仕立てに美男美女を登場させて想像して読んでいくと楽しくなるよ」
なにが楽しいんだよ、こんなものＫＹだろ、と言いたそうな顔つきでいる皆に、トレイシーは、愛嬌のある笑顔を浮かべてそう提案した。
日々勉強に追われていたトレイシーの息抜き法は、そうやって歴史の教科書を開く度に、妄想に耽りながら歴史を学ぶことだった。
それはやってみると楽しく、夢中になって学べるとあって一石二鳥であった。
「何それ？
新しいマスターベーション？」

とエレノアが言った。
確かに妄想は妄想だが、トレイシーはそんなことを言ってる訳ではない。
「じゃあ、私がクレオパトラで、ジュリウスカイサルはジョージ・クルーニーかな」
と意外におやじ好きのアマンダ。
確かにジョージ・クルーニーなら格好良いシーザーだ。
「私は別に、そんな妄想必要ないな。
やる派だから」
とニコールが言った。
彼女は今年の夏、クラスの女子と夏に何人の男と寝るかを賭けて競い合っていた（フィクションです。
性病になるうえ、白い目で見られます。
絶対真似しないでください）。
それができるのは、彼女がセレブで性病に対抗するのも強いからなのか。
ニコール曰わく、相手は同じセレブの信用できる男子のみだったというが、そんな男のどこが信用できるのか。
まあ、所詮何が起こっても、ニコール自身の責任である。
だが実はニコールは、そんな賭けをしたにもかかわらず、途中怖じ気づいて、夏に彼女と関係を持った男子はたった2人だけだったそうだ。
だがそれだけでも寒気のする話だとトレイシーには思われるのだった。
たった2人といえど、このカリフォルニアにワンシーズンの間に簡単に兄弟をこさえたニコール達が信じられなかった。
そういうことは、してはいけないし、もっと自分を大切にするもんじゃないだろうか。
だが実際にこういったバカな女子が、アメリカはもとより、世界中にいたりするのが現代なのだ。

だが考えてみると、これはこれまで時代の中で虐げられてきた女性達のジェンダーに対する挑戦であり、武勇伝として受け止めないこともあるが。
もしかして遺伝子間で女性達の恨みがましい復讐心が、こうして現代に受け継がれてきているのだろうか。
だとすると女性達の性に対する高速化は進み、何かの本に書いてあったように生物が環境の変化に応じて変化を遂げていった通りに、人間の男達が子供を産む日も近いのではないだろうか。
確かにゾッとする話だが、今よりもっと自由に女性達は生きていくのではないだろうか。
だからといってそれが幸せかは解らないが。
そうなると世の中の女性達はフェミニンな服を脱ぎ捨て、古代ギリシャスパルタの女達やアマゾネスのように筋肉隆々なウーマンズフィジカルワールド（今はあるか知らないが、アメリカの女性ボディビルダーマガジン）のような状態になるのだろうか。
まあそうなると、巷にゲイやらバイやらがはびこる時代になりそうだ（すでになってるけどね）。
このカルフォルニアに通称ファゲット（ゲイ）タウンと呼ばれる地域があるとご存知だろうか。
その名の通り市長も市民もゲイやバイの溢れる街である。
腐女子が喜びそうな話題であるが。
それはおいといて、思わずそんなことを考えてしまったトレイシーは我ながら自分の考えが怖くなった。
まあともかく、何故だか若い女の子が集まると、話は下ネタへと発展したりするものだ。

またニコールが、でもどうせなら私は、ネルソン提督がいい。
だってイケメンだったんでしょ。
と言うと、アマンダは負けじと、カエサルだって良い男でプレイボーイだったんだから。

などと言い合いながら、勉強会は過ぎていった。
だけどトレイシーの出した提案の為か、アメリカの歴史から、皆それぞれが好みそうな題材を調べることになっていた。
興味がわき、書きやすい所で、マリー・アントワネットの生きたロココの時代や古代ローマのカエサルの時代について調べたがる者もいた。
カエサルの時代はきっとＨＢＯのドラマローマの影響が強いからのようだ。
だがはっきりいって、ドラマローマは所々脚色されていて、史実と異なってたりする。
何故かエレノアは、一番得意そうなマリー・アントワネットよりも、暗い闇に包まれたヨーロッパの異端審問についてレポートを書くことにした。
危ない残忍な話に興味を持つのも、このくらいの女の子の特徴なのだろうか。
危ない娘である。
因みに、トレイシーはというと、中国春秋時代の孫武について調べていた。
彼女は中国の兵法孫子の戦略戦術に大変興味を持ち、そこにロマンを感じるのであった。
だが、しかし別に孫武は彼女の頭の中で美男子として登場したわけではない。
ちゃんと東洋の老齢な親父が頭に浮かんだのだけどね。

翌日のことだ、物理の授業中トレイシーの携帯にメールが届いた。
見るとアマンダからである。
メールは、トレ（トレイシーの愛称）、土曜、クラブデビュー、ＯＫ？
と中途半端に暗号化よという感じの文面が書かれていた。

こんな変てこな文でも、何が言いたいのかなんとなく察しはしたが、取りあえず、トレ、クラブ？何？何のこと？とメールを送り返した。

すると、またアマンダからメール。ＯＫ、じゃあ後で、カフェテリアに集合、詳細はその時に

と、また変なメールが送られてきた。

何だこりゃ？と思いながら、とりあえず授業が終わるのを待った。

―つづく―

苦手なホームワーク（後書き）

そういえば、以前彼女達の学年度を間違って日本の感覚で一年生としてましたが、スイマセンあれは間違いです。
アメリカの学校では高校からの学年は９年　１０年　１１年　１２年となるそうでして、日本の学年度のように１年　２年　３年　とはならないそうです。
どこかで分かってはいたんですが、定かではなかったので、そのまま描いてしまい、再度調べたら案の定でした。
本当に毎度毎度申し訳ない。
因みにこの進学校も小中高とエスカレーター式ですが（但し進級テストはある）、トレイシーは市立から９年生（日本でいう中３くらい）の時に編入してきている設定です。
またプレッピースクールについて調べてない所が色々あるのでまた書き直し、こうして告知させていただくかもしれません。

クラブへＧＯ　ＧＯ　ＧＯ１（前書き）

またまた長ーくお待たせしてすいませんでした。
年末は色々忙しかったですが、続きはすぐに載せますので、あと、
明けましておめでとうございます。
今年もまた宜しくお願いします。Ｖ（＾－＾）Ｖ

クラブへGO　GO　GO1

授業のベルが鳴り、トレイシーは大急ぎでカフェテリアに行ってみた。
すると既に普通グループの仲間達はテーブルを囲んでトレイシーを待っていた。
「トレ、待ってたよ。
メール読んだでしょ」
「読んだけど、あれってそのまんまな意味な訳？」
話はやはりアマンダから送られてきた文面通りという訳で、いつの間にか皆で、今週末の土曜日にクラブへ行こういうことに決まったらしかった。
当然そんな所に行ったことのないトレイシーにとっては、初めてのクラブデビューということになる。
トレイシーもクラブとやらに是非行ってみたいのだが、だが一つ問題があった。
その問題というのは、トレイシーの真面目な両親になんと言い訳をして、遅い時間に怪しまれずに外出をするかということだった。
だがその問題をアマンダがいとも簡単に解いてくれた。
「だったら、その日は家に泊まりなよ。
お母さんには、お泊まり会って言っとけばいいじゃん」
名案だと思ったが、もしも外出中トレイシーの母から電話があったらどうしようかという問題もあった。
「それも大丈夫。
その日は家の両親は外出してるし、家に丁度父方の叔母さんが泊まってるんだけど、叔母さんと私達って仲がいいんだ。
彼女に家のママの振りして貰って色々誤魔化して貰うから大丈夫よ」
とまたアマンダからナイスな提案をしてもらい、トレイシーは安心して初めてのクラブ体験へと行く決心をしたのだった。

という訳で、土曜日の８時に彼女達が車で迎えに来てくれて、９時頃にクラブへｇｏということになった。
土曜日、トレイシーは家で少し勉強を済ませ、約束の時間まで入念に持って行く荷物のチェックをしていた。
今日はアマンダの家に泊めてもらうから、寝間着のピンクのスエットこれはジューシークチュールっぽく見えるやつ、クラブに着て行く着替えの黒のテロテロ素材のノースリーブのシャツに黒レースのフレアミニ、下に穿くラメ入りタイツ、あとママから拝借した化粧品をお手製化粧ポーチに詰めて、夏休みにバイトして買ったパフューム、安価だけど香りの良いものだ。
出掛ける時にママに怪しまれるといけないので、服は普通のワードローブを着た。
ベージュのざっくりセーターに、ボトムはジーンズ、袖無しのマントコートを羽織り、黒のブーティタイプのショートブーツで、化粧は薄めのリップ程度にしておいた。
バッチリメイクは車の中でするつもりだ。
これだけでも、あの真面目な両親には洒落て見えそうだから、何か言われそうだが、その時には良い言い訳でも考えて誤魔化せばいいと考えたのだった。
８時きっかりにアマンダ達が車で迎えにやって来た。
案の定、トレイシーの母は心配して、彼女を見送ろうとついて来た。

「大丈夫なの？
あんなお金持ちの子達とお泊まり会だなんて、向こうのご両親に迷惑かけちゃダメよ」
「大丈夫。
心配ないってママ。
皆で楽しくパジャマでおしゃべりするだけよ」
二人でそんな会話を交わしながら外に出てみると、トレイシーの母は彼女を迎えに来た友人達を見るや絶句してしまった。

彼女達はアマンダの2つ上の姉を運転手として連れてきていた。
それはまあいいのだが、なんとアマンダ達は、そのままクラブへ行ってもいいように、バリバリおしゃれにキメまくっていたのだった。

「ねえ、何で彼女達あんなにキラキラしてるの？」
そのトレママの問い通り、アマンダ達は髪にまでシャイニーなラメをつけまくっていた。
良い言い訳を考えればいい、そう考えていた筈なのだが彼女達のゴージャスな装いを前になかなか言い訳が浮かばなかった。
どうにかその場を誤魔化そうと一生懸命考えた、するとトレイシーの口をついて出た言い訳は苦しいものだった。
トレイシーは母に、友達の頭に付いているのはたぶん金粉だろうと言った。
彼女は真面目な顔をして、友人達は皆ヨガ教室に通っており、瞑想中は何とかプーラーラというものがでて、手やら身体やらに金の粉が現れるのだ、たぶん今日は皆でレッスンを受けてたんだろうとのたまわったのだった。
それを聞いた母は、何よそれと言いたげな顔つきをしていた。
すると今度はトレの母は、じゃあ何で皆あんな派手な格好をしているのかと聞いてきた。
「あの、言ってなかったっけ？
お泊まり会の前に皆で仮装パーティーをするって」
「仮装パーティー？」
「そうよ、皆で好きな映画のキャラクターとか、モンスターに化けて遊ぶの。
因みにアマンダは宇宙から来た女エイリアンよ。
たぶんスタートレックとかにでてくるキャラなのかも。
ハハハ・・・」
と黒のレザーワンピの上部のみが見えているアマンダを指して言った。

確かにそこから見える彼女は前髪をポンパドールにして引っ詰め髪したヘアスタイルや、ここから見えるその服装からSF作品に出てきそうに見えなくもなかったが、どちらかというと昔懐かしマトリックスといった感じだった。またクラシックなヘアに今年流行りのライムイエローのワンピースを着ているエレノアは映画バーレスクのクラブで歌うクリスティーナ・アギレラだと言い、あとの3人は適当にたぶんチャーリーズ・エンジェルの仮装かなと苦しい言い訳を続けた。

「皆は綺麗系にしたみたいだけど、私はアマンダの家で包帯かトイレットペーパーを借りてグルグル巻きにしてミイラ男の仮装をするの。

だってこの方がお金もかからないしね。

あっ、別にいじめられてる訳じゃないのよ」

トレママはそんなトレイシーのバカな言い訳を聞きながら口をあんぐりと開けていた。

「あーっ、ママ大丈夫。

パーティーって言っても皆で仮装して騒ぐだけで、コーラやジュースで乾杯するだけだから。

それに遅い時間まで騒いだりしないし、すぐに眠るから」

そうは言われても、トレママが納得する訳がなかった。

「本当に大丈夫なんでしょうね？

パーティーなんて、まさかお酒を飲んだりしないでしょうね？」

「大丈夫、本当にお酒なんて飲まないし、ちょっとふざけて遊ぶだけだから。

それに私の友達はお金持ちのお嬢様なのよ、普通の中流家庭と違うから遊ぶ時も格好が派手に見えるだけよ」彼女の母は最後まで大丈夫なのかとトレイシーを心配していた。

母がこんなに心配なのは、リアリティ番組やドラマゴシップガールでプレッピースクールに通う学生の派手な生活を描いたドラマを見過ぎたからだろう。

テレビの悪い影響で、口にこそ出さないが、彼女の両親は金持ちの子弟なんてろくなもんじゃないと思っているらしかった。
「本当に、お酒とか飲んじゃ駄目よ。
ましてやドラッグなんて許しませんからね」
「ママ、絶対に約束する。
本当に大丈夫だから。
じゃあね」
どうにか母に阻止されることもなく、トレイシーは初めてのクラブへと向かう為、車へ乗り込んだのだった。
―つづく―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4613s/

ガールズ ライフ ダイアリー

2012年1月4日01時48分発行